

御霊神社奉納舞

日時 平成27年6月14日 (日)
午後2時30分より

場所 御霊神社 本殿

〒541-0047 大阪府中央区淡路町4-4-3

TEL 06(6231)5041

演目 及び 出演者

一、 地唄	一、 地唄	一、 地唄
桶取り	山村舞	菊の寿
山村若織	山村若翫之	山村若祿之
三弦・歌 菊央雄司		
箏 菊央柳ゆかり		

解 説

地 唄 菊 の 寿

周の穆王が寵愛していた慈童という童子が、誤って帝の御枕を踏み越えてしまった咎により山奥へ流されますが、帝は可哀想に思い、釈尊から授けられた八句の偈の内の二句を童子に伝授します。慈童は授けられた偈を忘れることのないようにと菊の葉にこれを書きつけます。その菊の葉にたまった露が少しづつ谷を流れる水に落ちると、水がすべて天の靈薬となりました。慈童は不老長寿の仙人となり八百余年の後まで老い衰えることがなかったと—菊の花を寿ぎ、喜び舞う様を現わすご祝儀曲です。

地 唄 山 村 舞

”ひとさし舞う山村の”で始まる山村舞は、流派にとっての舞の「基本」がすべて詠み込まれています。

この舞は山村の大切な振り・型が包括されており、初級名取の試験曲となっています。

これがきっちり舞えて初めて「山村」の名が許されるわけです。

地 唄 桶 取 り

壬生狂言の「桶取」に拠った曲です。尼ヶ池の水を桶に取って壬生地蔵へ日参する、左手の指が三本しかない美しい白拍子を見初め、二人は互いに心惹かれていきます。

懐妊中の本妻は嫉妬に狂いますが、二人が逃げた後には自分の不器量を歎き、虚しく思うのです。

二人は連れ添って行く事を示しつつ、桶にちなみ本妻の怨みを汲むことよと歌い舞納めます。